

医療現場の現実 No.4

チーム医療と SBAR

—— 多職種連携の言語を持つ

🎯 今日のゴール： 現代医療が「孤独な名医」ではなく「チームで行う協働作業」であることを理解し、チーム内コミュニケーションの標準ツール SBAR (Situation・Background・Assessment・Recommendation) を使って正確・簡潔に情報伝達できるようにする。

🚩 この授業の問い

1. なぜ「伝えたつもり」が医療事故につながるのか？
2. SBARの4要素は何か。なぜこの順番なのか？
3. チーム医療において医師はどんな役割を担うのか？

💡 衝撃体験：「伝えたつもり」が起こす事故

💡 シナリオ： 夜勤の看護師が申し送りで「Aさん、血圧が少し高めでした」と伝えた。朝の担当医は「いつもより高め」と解釈したが、実際は収縮期180mmHgで緊急対応が必要だった。医師は何も処置しなかった。

🔑 問題は「伝えた/聞いた」ではなく「何を・どう・どの程度の緊急度で伝えたか」

医療現場の情報伝達では「曖昧な表現」「緊急度の不一致」「アサーション（意見表明）の躊躇」が事故の温床になる。SBARはこれを構造化して解決するツール。

採点者の視点

採点者はここを見ている —— チーム医療・SBAR・多職種連携で合格答案はこういう「構造」をしている

① なぜ同じ答えでも評価が違うのか

清光学院の講師陣は、これまでに皆さんと同じ志を持った先輩受験生たちの答案を何千枚も採点し、合格・不合格の判定を下してきました。その経験から言えることが一つあります。

「正しい答えを出していても、なぜそう考えたのかが見えない答案は、採点者の印象に残らない。」

チーム医療・SBAR・多職種連携では、SBARによるコミュニケーション根拠が答案の質を大きく左右します。

② チーム医療・SBAR・多職種連携で採点者が見ているポイント

「Situation→Background→Assessment→Recommendationで情報を構造化した答案」が採点者評価を上げる

 この授業の使い方

各問題のワンポイントには「採点者がどこを評価するか」の視点が含まれています。答えを出すだけでなく、根拠を一文添える習慣を意識しながら取り組んでください。

③ 総合型選抜・口頭試問でも同じ構造が問われる

採点者（大学教員）が口頭試問で確認したいのは「答えが出るか」ではなく「思考の構造を説明できるか」です。この授業で習得する「上から俯瞰する」視点は、あらゆる試験形式に通用します。

続きは講義でご覧いただけます

この教材には、採点者の視点・核心的な解法・入試問題・演習・まとめがさらに収録されています。

大学教授陣が設計した「普通の授業では出会えない接続点」を体験できる完全版は講義でご提供いたします。

清光学院 AP SEIKO 理系講座 © 清光教育総合研究所